

# 丸藤牧場

## 積極的な投資と効率的な草地利用、牛群管理による高収益実現

### 経営概要

所在地	中川郡中川町
家族構成	本人、妻、子供3人
経営面積	60ha（放牧地 25ha、採草兼用地 15ha、採草地 20ha）
飼養頭数	58頭（経産牛 41頭、育成牛 17頭）
飼養形態	フリーストール牛舎
生産乳量（出荷乳量）	285t/年
1頭当たり平均年間乳量	7,000kg
放牧類型	大牧区＋輪換、昼夜放牧（分娩が始まる10月は日中放牧）
放牧期間	5月上旬～10月末
圃場植生	ペレニアルライグラス、白クローバ主体 オーチャード、リードカナリーグラス他

### 新規就農のきっかけ

経営主の丸藤氏は工学部出身。一生続けられて独立してできる仕事として一次産業を志向した。腰が悪かったが、酪農ならできると思い、北海道の酪農家で実習している時に、三友氏の「マイペース酪農」を知った。また、放牧で有名な農家を訪ねる中で、池田氏（浜頓別）のペレニアルライグラス主体の短草利用による集約放牧（NZ方式）がわかりやすく、参考になったと言う。

夫婦とも道外出身で、農場リース事業を活用し、平成20年11月に新規参入。就農2年目から、投資をしっかりと体が動くうちに生産基盤を整備する方針とし、草地の4割を占める泥炭地を中心とした草地更新と暗渠整備、牛舎の改修、D型ハウスと堆肥舎の新築、住居の新築をした。1番草収穫後に放牧する兼用草地を多く設け、利用率の高い輪換放牧を実施している。

### 効率的な牛群づくりへのこだわり

育成牛を事故なく昼夜放牧するため、5～6か月齢の10頭が1群となるよう、性判別精液も用いて雌子牛を10～12月に生ませて5月下旬に1週間馴致する。1～4月は黒毛和種のF1を生ませている。生まれ月を限って後継牛を残すため、自家の成績のよい牛から採卵して、悪い牛に移植・分娩させることにより、改良を図っている。繁殖・分娩管理を秋～春に集中させることにより、春以降には草地管理に集中することができ、労働時間の分散化を可能としている。また、アメリカのブラウンスイス（ET）を経産牛で2頭、育成牛で4頭飼育している。

育成牛の管理については、40日間10L哺乳し、哺乳中からNZ産のアルミパック入り育成用中水分ルーサンサイレージを給与している。

60～70日齢で哺乳量を3～4Lにし、草を食べている感じがあれば離乳。離乳後はペレニアルライグラスの一番草のラップサイレージで一番良質なものを給与している。

飼料については、パーラーで乳牛用配合飼料を夏2.8kg/日、冬5.0kg/日、その他マグカルペレットと飼料用グアノ（リン酸カルシウム）を合わせて140g、自動給与している。放牧地の状態によって、ラップサイレージをほぐしてフリーストール牛舎内で併給することもある。

今年の草地更新に、ペレニアルライグラス「道東1号」・「チニタ」とフェストロリウム（ペレニアルライグラスとメドウフェスクの属間雑種）「バーフェスト」を主体とした、イネ科5品種マメ科4品種の多品種混播草地を5ha造成。更新は、排水の悪化、地面の凹凸が出てくれば実施し、自力で追播も行っている。

施肥は、土壌診断に基づき、石灰、1番草収穫後に堆肥も施用している。



放牧風景



（左）フリーストール牛舎 （右）パーラー

## 経営に対する考え方

日々放牧（放牧頭数の他に草量等）の記録と改善、ホワイトボード利用による家族内の情報共有を実践している。放牧に取り組む中で、4割を占めている泥炭地の管理や除草剤を安易に使わずにリードカナリーや湿地植物をコントロールするのが難しいと感じている。

クミカンによるキャッシュフローだけを意識するのではなく、7年間程度の中期計画を年に2～3回見直しながら、積極的な投資を行っている。これまでに、配合飼料と化成肥料を抑制して、暗渠や施設改修、堆肥舎など必要な投資を行ってきた。現在、年間1頭当たりの配合飼料給与量1,300kgに対して、7,000kgの乳量であるが、将来的には1,000kgの配合飼料で乳量を落とさない放牧を行っていきたい。人とのつながりを大切にしながら、若い人に対して、経営者意識、中期経営計画書の作成、投資の重要性について教えていき、100年以上続く牧場に育てたいと語る。

<放牧畜産基準認証取得 (A16-05)>

取材日：平成29年8月1日

連絡先：上川農業改良普及センター上川北部支所

電話：01656-2-1169